やユーモラスに、的確に一首にしている。パーヴォ・ヤルヴィは、エストニア出身の五十代の男性指揮者。

手袋を外しケータイのボタン押す君のいた街を持ち帰るため　屋良健一郎

彦根をたずねて、尚文子（伊井文子）の戦前の歌稿を見た折の一連中の一首。ケータイのカメラで彦根の町並みを写し沖縄にもちかえるの意味。手袋で季節をあらわし、写真を撮る行いを「街を持ち帰る」と表現した遊び心が持ち味。かつての琉球王・尚家の長女に産まれた文子は、十三歳で信綱に師事して作歌をはじめ、のち、口語自由律短歌にうつって、二〇〇四年に他界するまで作歌をつづけた。彦根に住んだのは、かつての彦根城主・伊井家の井伊直愛（後の彦根市長）と結婚したから。

解体の刃にぬめぬめと現はれてごつんと赤きまぐろになりぬ　花美月

築地の魚市場に取材した作の一首。解体されてはじめて、馴染みの鮪の刺身の色が出現するところを、ユーモラスに表現していて注目した。

まんだらけで児に帰りノーベルで大人に戻り東京歌会へ　來田康男

「まんだらけ」は漫画専門書店でここは中野店だろう。「ノーベル」は東京中野にあるレトロな喫茶店。自分の中に住む子供そして大人をたしかめてから東京歌会に出席する、そんな意味を読んでいいだろう。関西在住の作者が東京歌会に出席する前の楽しみ方である。

駅近にナーサリー二つ三つできて高架下の空き地早起きになる　佐佐木朋子

ナーサリールームは〇～五歳児までを保育する施設。朝の出勤時に子供を預ける人が集まるようになって、かつての空き地が早くから始動しはじめる。一帯の空気が変わったその変化が主題。時代が移り、こうして町が変わってゆくだ。

冬空に直方体を差し出して人は急ぐやビルの谷間を　松本秀一

「冬空に直方体を差し出して」という表現が味わい深い。設計者や建築家にこういう感覚はあるのだろうか。用途、利便性等々を考慮するのだろうが、直方体を差し出す、という感覚はないだろうと思う。だからこそ、歌にする意味があるのだ。

亡き人に供えし林檎は香沁みてつくづく不味し姉なれば食む　鈴木香代子

仏前に供えられていた林檎をがまんしてたべている場面。「つくづく不味し」の率直な表現に驚かされる。

冬空はこよなく晴れて十二月十八日今日冨士田元彦忌　谷岡亜紀

冨士田元彦は、六〇年代終わりから八〇年代までの歌壇をリードした編集者。角川書店「短歌」編集長として、雁書館社長として大きな足跡を残したが、二〇〇九年に七十二歳で他界した。「こよなく晴れて」に追悼の思いが読める。